九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

円地文子文学における性のモチーフ研究

張，亜璐

https://hdl.handle.net/2324/5068281

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	張　亜璐
論　文　名	円地文子文学における性のモチーフ研究
論文調査委員	主　査　九州大学　准教授　西野常夫 副　査　九州大学　教授　松本常彦 副　査　九州大学　教授　波潟　剛 副　査　新居浜工業高等専門学校　名誉教授　野口裕子 副　査　信州豊南短期大学　教授　田中愛

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、円地の小説に見られる性的モチーフに焦点を当て、それが作品の構造や主題にどのようにかかわっているかということを考察している。そうした考察を通じて、論文全体としては、作家は性的モチーフを創作の重要な動機に位置づけ、人間の生活が性的要因にいかに左右されているかということを様々な角度から描こうとしたのではないか、という仮説を論証しようとする内容になっている。

作家の創作傾向の特徴を問題にするこの種の研究の場合、議論の説得性を高めるためには、ある程度以上の数量の作品について具体的に検証することが求められるが、本論文ではその条件は満たされていると考えられる。取り上げられている作品は多様で、必ずしも一般的には高く評価されていない通俗小説も含まれるが、素材を選択する際、論者が考えていた基準は性的モチーフの活用度の高い作品であったということは容易に想像される。各章で論じられる作品はいずれも、性的なものを中心にすえて物語を描こうとする作家の意図が鮮明に伝わるものばかりであると言える。また、各章のテーマ設定のしかたについて言えば、これとは別の分類も可能であったのではないかとも考えられるが、今回の章の区分も一つの例として有効であると考えられる。

論文の各章の内容は以下のようになっている。

序章では先行研究を概観し、また本論文の構成と方法論について説明している。さらに本文で詳しく取り上げていない作品群についても概観し、円地の性的モチーフの使い方の全体的傾向について説明している。

第一章では、「小さい乳房」と「鹿島綺譚」を取り上げ、近親相姦的な性の描き方について考察している。とくに「鹿島綺譚」では、選民意識に基づく広洲家の近親相姦のならわしにおける男女間の性の描かれ方を分析し、そのならわしの主導権が男性から女性の手に移りつつあることを指摘した上で、現代においてなお近親相姦のならわしを維持している一族を登場させた点に、人間の性行動に対する円地の文化人類学的ともいえる関心を見ている。

第二章では、「ひもじい月日」と「団地夫人」を取り上げ、夫婦間の性の問題の描き方について考察している。「ひもじい月日」では、愛情に飢えつつ忍辱の生涯を送る女性が、死ぬ直前に精神的な高みの境地に達していることを指摘している。また、高度経済成長期に新しいタイプの住環境として出現した団地を舞台とした「団地夫人」では、団地特有の住環境を巧みに利用して夫婦間の倦怠を団地内の＜夫婦交換＞によって解消するという物語の語られ方に、性の問題に対する作家の寛大

な考え方が暗示されていると指摘している。

第三章では、未亡人を主人公とする「二世の縁　拾遺」と「冬紅葉」を取り上げている。両作いずれにおいても、身近な人間の恋愛や、性的なものを想像させる行動を目にして心理的影響を受けた結果、それまで自らに課していた性的抑圧を旨とした心のありかたがゆらいでいくさまが描かれていると指摘している。

第四章では、奔放な男性遍歴を重ねる女性の性の描かれ方を考察するために、「現代好色一代女」と「結婚相談」を取り上げている。「現代好色一代女」では、変態的な夫婦生活を強要された主人公が、その結果として性本能に歯止めがきかなくなり、娘婿を含め、数々の男と関係を持つ性の遍歴に走るさまを確認している。「結婚相談」では、コールガールになった主人公が、売春によって女としての価値を回復できたと考えるにいたる物語の設定に注目し、性本能が人生を左右するほどの影響力を持っていることを作家が伝えようとしているのだと論じている。

第五章では、老人もしくは中年以降の性的なものの様態の描かれ方を考察するために、「花散里」、さらに「妖」、「「遊魂」三部作」、「彩霧」を取り上げている。考察の結果、円地のこうした中年以降の主人公は往々にして奔放な性的空想を働かせ、現実と幻想が綯い交ぜになった世界に遊ぶ傾向があることを指摘している。

第六章では、「おとこ女郎花」における女性同性愛と「女形一代――七世瀬川菊之丞伝――」における女形俳優の男性同性愛が円地文学における性のモチーフの幅広さを示すものであると論じている。

結論では、各章で示した性のモチーフの多様性と性的なものに対する作家の深い関心と理解について総括をしている。

公開審査においては、作品の分析がやや不十分であると感じられる箇所があるとの指摘があったが、そうした箇所も本論文全体の価値を大きく損ねるものではないと判断された。本論文は、円地の小説の特徴を性のモチーフの多様性にあるとし、それについて、先行研究のない作品も含めて詳しく論じ、一定の説得性を得ている。以上のような成果に鑑み、本論文は博士（学術）の学位に値すると認める。